

2015年12月6日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書1章24～38節

説教：おめでとう、恵まれた方

あらすじ

前回、祭司であったザカリヤのところに御使いガブリエルが現れたとき何が起きたのかを見ました。ザカリヤは主を恐れかしく、なにごとにも神が決められとおりに正しく行って神からも高く評価されていた人でした。そんなザカリヤでも、突然目の前にガブリエルが現れたとき、大きな恐怖に襲われてしまいます。どまどうザカリヤに、御使いは語ります。「あなたと妻のエリサベツは高齢で子供が産めない体になっている。けれども、エリサベツはもうすぐ妊娠し、やがて男の子を産みます。その子の名前はヨハネと呼びなさい。」これを聞いていたザカリヤは、そんなことをどうしたら信じられるだろうかと口走ってしまいます。御使いは、「そんなに信じないというのなら信じるようにさせて上げましょう。子供が産まれるまであなたの口はきけなくなります。」そう言われてしまいました。ザカリヤはそれほど取り乱していたということです。

1 イエス・キリストが来られるとき

1) 人の助けが必要な姿になる

今日はアドベントの第二週目を迎えています。アドベントには、神のひとり子イエス・キリストがマリヤを通して人となって来られるのを待ち望む、そんな意味が込められています。でも、どうしてこの方はマリヤのからだからお生まれになったのか。考えてみれば不思議です。この方は、道ばたに落ちている石ころからもアブラハム子孫を起こす

ことができるのです。人の力など借りず、ご自分の力だけで人の姿になることは朝飯前のはずです。ところが、神はそのような方法はとりません。マリヤというひとりの女性の中からだを通して赤ちゃんの姿となって生まれます。なぜそのような方法をとられたのでしょうか。

すべてのことがわかるわけではありません。それでもいくつかのことがわかります。赤ちゃんはどんな姿をして生まれますか。当然ですが裸で生まれます。何も持っていません。何もできません。人の世話を受けなければ生きていけません。この方は、この世界のすべてを創造し、すべて支配しておられる方なのに、小さくて無防備な姿となって私たちのところに来られました。私たちの腕に抱かれるために、神はわざわざそのような方法をとられました。

2) こわい神の姿ではなく

私たちは「神」に対してどんなイメージを持っていたでしょうか。典型的な例を紹介しましょう。秋田県のある地方に「なまはげ」という行事があります。みなさんもテレビで見たことがあるかもしれません。おおみそかの頃、鬼の面をかぶり、刃物を振り回して「泣く子はいないか」とか「悪い子はいないか」と大声を発しながら家々をまわる行事です。小さな子供はそれを見て、恐怖のあまりに泣き出して、「もう悪いことはしません」と叫ぶのだそうです。神は手に刃物を持って、私たちのところにやってくる。そんな恐ろしい

メージがあるのだらうと思います。

ところが聖書の神はどうでしょう。もちろん神は私たちの罪をさばく方ですが、二千年前に人となって来られたときはそうではなかった。人を罪の縄目から救い出すために来られました。どうやって救い出すのか。ご自分が赤ちゃんの姿になられてです。そのようにして、神は私たちの敵ではなく味方であることを示してくださいました。

2 マリヤ

1) とまどった

今日開いているところで、御使いガブリエルは、あるときマリヤのところに現れ、「おめでとう、恵まれた方」と言います。これを聞いたマリヤは、ひどくとまどったと書かれています。どれくらいとまどったのか。マリヤは神から選ばれた女性です。ですからぎつとすばらしい信仰者だったに違いない。38節で、「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばのとおりこの身になりますように」と告白しています。御使いが突然現れ、御使いから何を言われても従順に従っていった。そう思うかもしれません。しかしこの告白をマリヤはすんなりと言えたのでしょうか。そのことを考えていきます。

2) マリヤが通っていく苦しみ

御使いは、マリヤにこれからマリヤのからだに起きていくことを告げます。「ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。」これを聞きマリヤは驚きます。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」

マリヤはヨセフと結婚の約束をしている

身です。御使いのことばによれば、ヨセフのではない子供を宿すことになります。ヨセフがこれを聞いたらどう思うか。マリヤは真つ先にそのことを考えたでしょう。申命記 22章には、婚約期間中に他の男と関係を持った者は石打の刑にすべしと書かれています。もしヨセフが理解してくれなければ、人々から怒りのことばを投げつけられ、冷たいさげすみの視線を受けながら犯罪人として殺されるかもしれません。

そんなことを考えると、御使いが「おめでとう、恵まれた方。主はあなたとともにおられます」と言っても、とてもおめでたい気分にはなれません。いったいどこが恵まれているというのか。こんな恵みならいりません。私は平凡な結婚生活を送りたいだけですから、どうか私ではなく他の女性を選んで下さい。辞退しますと言いたいところです。

3) マリヤがいただく神の恵み

そんなマリヤに御使いは、「主はあなたとともにおられます」、「あなたは神から恵みを受けたのです」と言います。

その恵みについてですが、私たちはこんな祈りをします。「神さま。どうかこの私に恵みを与えてください。」もちろんそう祈ってよい。けれど神が与えてくださる恵みとは何か。マリヤはどんな恵みをいただきましたか。ときには私たちがとまどうようなこと。ときには厳しく見えるような、そんな道さえ与えることもある。それも神の恵みだということです。神の恵みだから、私たちがいつも安心、いつも安全、なにも苦勞がないというわけはなさそうです。

とすると、神の恵みとはいったい何でしょうか。マリヤはどんな神の恵みをいただいた

のでしょう。確かに聖霊の力によって神の子を宿すという恵みが与えられましたが、それだけだったのでしょうか。

御使いはこう言っています。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」神の恵みとは何か。すべてこのことばに集約されているように思います。主があなたとともにいて下さる。これこそが、「おめでとう」と祝福を受けるほど喜ばしい神の恵みだということです。

マリヤは信じられたのでしょうか。自分の体の中に主が宿ってくださる。それは大きな喜びであったかもしれないけれど、いっぼうその先のことを考えたらどうなるだろうと不安に思わなかったはずはありません。ヨセフとの縁談はなかったことにされ、最悪の場合殺されることだってありうる。仮にそうならなかったとしても、厳しい差別を受けることになるはずです。そのことを考えたら、心から喜べない。だからひどくとまどうのです。「これはいったい何のあいさつか」と考え込むのは当然です。

3 神の励まし

神はマリヤが苦しむことを予想していなかったのでしょうか。あるいは、神のご計画のためには、マリヤが苦しもうがそんなことは関係ない、ということなのでしょう。そんなはずはありません。例えどんな信仰深い女性であろうとも、御使いのことばを聞けばひどくとまどい、ひどく恐れることをご存じです。そのため、神はマリヤを励まそうとあらかじめ準備をしておりました。それはなんなのでしょうか。「こわがることはない」ということばですか。もちろんそれもあります、もっと具体的なことです。

36節。「ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女と言われていた人なのに、今はもう六ヶ月です。神にとって不可能なことは一つもありません。」

マリヤの耳にも、エリサベツのことについて、いろいろなことが聞こえていました。ずっと子供ができずにいたのに、今はもう六ヶ月の体になっている。どうして子供が与えられたのか。マリヤも他の者もみな、不思議だと首をひねっていた。でもいま、御使いのことばを聞き、マリヤの心の中に一つの光が見えてきました。もしほんとうに神の力によってエリサベツに子供が与えられたというのならば、自分の身に起きたことも悲観しなくてもよいのではないか。もっと前向きにとらえてもよいのではないか。よし、エリサベツのところに行って確かめてみよう。そんな思いが芽生えます。実際、このあとマリヤはそうしていきます。

前回、イエスが来られる前にどうしてわざわざヨハネが産まれる必要があったのかと言いました。別にそんな複雑な手順を踏まなくても、イエスお一人が来てくださるだけで十分だったはずだ。もちろんそのとおりです。しかし、もしそうしていたらどうなっていたか。マリヤの身になって考えてください。もし親類のエリサベツのことがなかったなら、ほんとうに孤独だったはず。喜びもなにもない。主がともにおられると言われても、ただ恐怖と不安の中で過ごすしかなかった。でもエリサベツという例が身近に与えられました。心配事は沢山あることには変わりがない。でもエリサベツを見ることで、主がいっしょにおられるという平安が与えられているという実感が湧いてきました。そう

やって夫なるヨセフといっしょに困難な道を歩んでいきます。

やがてマリヤは自分のからだを通して産まれてくるイエスを自分の手で抱くこととなります。そのからだが、十字架において私たちの罪のために裂かれていきます。神の救いのみわざの深さを思い起こします。